

352

さすかたはなくてたゞ飛とぶほたるかな

蒼山そうざん

幕末、天下に知られた宗匠で、生涯を旅に過ごしました。縁あつて郷土を訪れ明治2年下石田の小池家の別邸で没しました。句は、行方定めぬ自らの生涯を、無心に飛び交う螢になぞらえた辞世です。

門人には小池古心、安間木潤、久米甘谷がいます。また京の公家、幕末の志士とも交際があり、金原明善の治山治水事業について政府関係者との仲立ちをしました。



季語 ほたる (夏)
場所 東区安間町
明善記念館
建立 明治2年

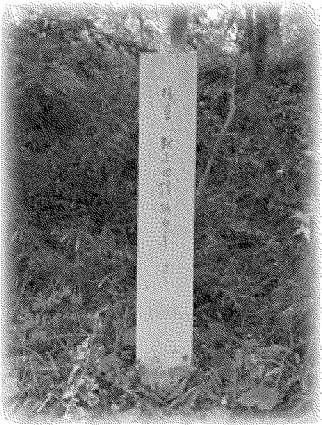
長島 蒼山 (1819 - 1869) 出羽国 (山形県) 赤湯の人。通称・慎七。別号・摩訶庵、雲の屋。晩年下石田に移り、小池古心邸で没。禁裏にも知られ、金原明善の事業の影の功労者。

367

残墨に戦国非情梅白し

風生ふうせい

二俣城址に立つと「国破れて山河在り」が思い浮かびます。21歳で自刃させられた家康の長男・信康、38歳で斬殺された家康の正室・築山御前。命じた信長は本能寺で果て、命に従わざるを得なかった家康は天下人となる。本当に戦国の世は非情です。そうした人の世の有為転変・無常をよそに、白梅は今年も咲いているということです。漢字多用の硬い表現も効果的です。



季語 梅 (春)
場所 天竜区二俣町二俣
二俣城跡
建立 昭和48年

富安 風生 (1885 - 1979) 愛知県の生まれ。本名・謙次。逋信省に奉職。『若葉』を主宰。妻は天竜区阿多古の人。姉は北区三ヶ日町に嫁ぐ。

386

しばらくは花の上なる月夜かな

蕉翁

「満開の桜、空には朧月。春宵一刻値千金。しばらくはこの美しい眺めを楽しもう」とあり、桜の名所吉野山の大観を詠んだものと分かります。

松島十湖が撫松庵の築山に、最初に建てた3碑（他に夷白・嵐牛）の一つです。選句にあ

たつての心、祖翁芭蕉の生き方に学び、俳諧に生きようとする静かな闘志が伝わって来ます。



季語 花（春）
場所 東区豊西町
豊西上公会堂
建立 明治12年

松尾 芭蕉（1644 - 1694）伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

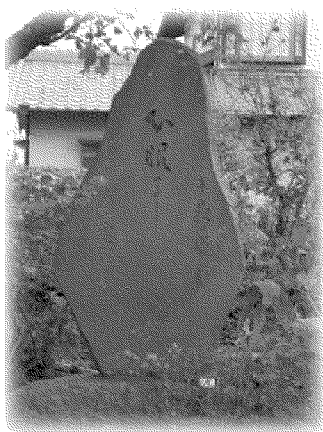
414

心眼にきく夜の深し露の音

春雄

春雄は、笠井新田町の十湖門の中心で、十湖亡き後、若草会を設立・主宰し後進の育成に努めました。碑は春雄の七回忌の追善として、若草会によって建てられました。

「夜が次第に更けて行くと、心の眼が効くようになり、夜露の結ぶかすかな音が聞き取れることだ」というのです。春雄は大木随處、宮下以道、高橋味道と共に、十湖門の四天王といわれました。



季語 露（秋）
場所 東区笠井新田町
法光院
建立 昭和50年

高井 春雄（1888 - 1969）東区笠井新田町の人。本名・芳雄。別号・大蕪庵、好文居、清美庵。十湖門の四天王の一人。十湖亡き後、地元の十湖門の指導者として『若草会』を主宰。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

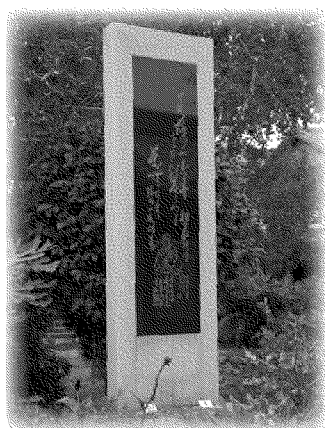
418

水僊すいせんや白しろきささううじじの友ともうつり

芭蕉ばしやう

芭蕉忌の句会で用いられた掛け軸をそのまま碑に写しました。「水仙の白い花が、新しいぴんと張つた障子の白さと映じあつて、ひとしお水仙の趣きを深めていることだ」というのです。

芭蕉像は地元の画家・山下青崖せいがいの作品。左に「萬世よろずよにひゞけ蛙の水の音」と芭蕉を称える十湖の句。芭蕉を祖とし、その系譜ふに連なることを誇りとした人々の緊張した芭蕉忌の姿が浮かびます。



季語 水僊 (冬)
場所 東区笠井新田町
法光院
建立 平成3年

松尾 芭蕉 (1644 - 1694) 伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

425

涼すずしささや休やすむ風越かぎこし富士ふじを見てみ

善慶ぜんけい

風越とは風越峠のこと。三ヶ日町平山から只木を抜けて引佐町奥山へ至る道は、清水善慶が私財を投じて拡幅竣工かくふくしゆんこうした道です。方広寺の参詣さんけい、物資の輸送など、格段に便利になりました。

「山道を登り切ると、急に視界が開け涼しい風が吹きあがってきた。遠くに富士を見ながらこの峠で一休みすることだ」というのです。空気の澄んだ日は、今でも富士山が見えます。



季語 涼しさ (夏)
場所 北区引佐町奥山
風越峠
建立 明治18年ころ

清水 善慶 (1824 - 1893) 北区三ヶ日町平山の人。本名・源平。風越峠、宇利峠の開削など公益事業に私財を投じた報徳家。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行



季語 さくら (春)
 場所 東区笠井新田町
 高井邸
 建立 平成 20 年

高井 三菁 (1910 - 1995) 東区笠井新田町の人。本名・誠一。別号・好文居。この地の十湖門「若草会」を父・春雄から継承。

448

草葬そうあんによき空そらのあるさくらかな

三菁さんせい

草葬とは高井邸です。祖父・父・本人と3代

にわたる十湖門で、父・春雄とともに「若草会」の中心でした。庭には、師・十湖、祖父・春鳳、父・春雄の独立碑が既に取りましたが、家族の配慮で改めて3代にわたるこの碑が建てられました。

「縁側えんがわから見る桜、梢こずえの向こうの高空、穏やかな日々。ここは竟ついでの棲すま、安住の地なのだ」というのです。祖父の碑「こ」といふ落付得たし花の中」と呼応しています。

460

そのまたむに手向みづけの水はるや春あめの雨

十湖じゅうこ



季語 春の雨 (春)
 場所 中区広沢二丁目
 西来院
 建立 昭和 58 年

松島 十湖 (1849 - 1926) 遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧ほうとくと報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。

碑は築山御前の墓所・月窟げつくつびよう廟の前。大正

期に建てられたものが戦災で焼失したため、再建しました。「春の彼岸、折から降る雨は、そのままあなたを悼いたむ手向けの水ですよ」というのです。築山御前は徳川家康の正室です。戦国の世の常とはいえ、信長の命をうけた家康により自害を迫られ、拒絶きよぜつしたため佐鳴湖畔で切られた悲劇の人です。遺骸いがいは西来院せいらいいんに埋葬されました。

468

田一杯居たか蛙のむら時雨

た い つ ば い い か える し ぐ れ

いちぐあんりようしよう
一具庵涼松

涼松が明治35年、郷里の龍雲寺を訪ねた時の吟。「むら時雨」は急にぱらぱら降って、しばらくして止む小雨で、本来は冬の季語です。ここでは蛙の鳴き声を時雨のようだととらえたのです。「田一杯居たか」に、突然鳴き出した蛙の多さに驚いたこと、自分を迎えた蛙に象徴される郷里への親しみが、挨拶吟的によく表現されています。



季語 蛙 (春)
場所 西区入野町
龍雲寺
建立 昭和9年

上村 涼松 (不詳 - 1918) 西区入野町の生まれ。伊藤家から上村家に養子に入る。本名・静九郎、別号・一具庵。東京で七十歳で没したと伝えられる。

475

瀧静寂御山靈感穴かしこ

た き し じ ま み や ま れ い か ん あ な

はくじゅそうげつそ
白寿莊月鼠

佳菊庵社中として、主宰の森月鼠の90歳の長寿を記念した一門の建立です。あらかじめ建立地を不動寺に定めての吟です。周囲には一門の碑も並んでいます。

句意は「周囲の静寂を破るように、瀧の音だけが響いている。この瀑布山の何と神々しく畏れ多いことであるよ」というのです。長寿を願い白寿莊を名乗った月鼠は、翌平成3年に急逝、享年92歳でした。



季語 瀧 (夏)
場所 浜北区平口
不動寺
建立 平成2年

森 月鼠 (1900 - 1991) 東区半田町の人。本名・繁。別号・佳菊庵 (四世)。この地における連歌の捌きに精通した最後の宗匠。佳菊庵三世・森晴虹の嗣子。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行



季語 彼岸（春）
 場所 中区鴨江四丁目
 鴨江寺
 建立 昭和初めころ

春秋の彼岸、鴨江観音は大勢の市民で混雑しています。長柄杓で阿伽井戸の浄水をかけて、地藏尊に手向けることは、地藏尊や亡き人の供養となり、また、自分の心を清浄にし、身を清めることにもなります。今も昔も変わらない光景です。「彼岸の今日、水向地藏尊の廻りは善男善女で賑わっている。さあ、たつぷりと水をかけてやりましょうよ」というのです。

久野 仙雨（不詳～1966）中区平田町の人。医師。本名・茂。旧派から新興俳句まで幅広く交流をもった。俳句結社「海坂」の前進の「あやめ会」結成に参加。

487

たつぷりと彼岸地藏へ手向水

仙雨

489

頼むぞよ案山子の笠の身の終り

六々庵巴静



季語 案山子（秋）
 場所 中区鴨江四丁目
 鴨江寺
 建立 宝暦6（1756）年

名古屋の人で、郷土に蕉風を伝えた初期の頃の俳人。別れにあたって門人たちは師の古笠を形見としてもらい、没後埋めて塚としました。句には「役目を終えた案山子の笠を納めるように亡き師の笠をここに埋めて、未永く我々を見守ってもらおう」との門人たちの気持ちが入められています。現・磐田市の門人が中心となり、『笠農恩』という追善句集を発刊しました。

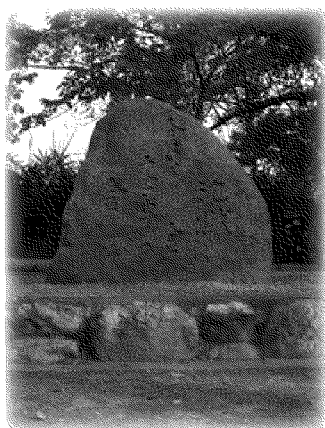
太田 巴静（1678 - 1744）美濃国（岐阜県）の生まれ。本名・弥平次。巴静の号は「芭蕉＝ばしょう」の訛りに由来。初期の蕉風俳諧紹介者。

506

沈黙は金なり金木犀の金

ちんもく きん きんもくせい きん

「どちらかというとは私はおしゃべり、特に若い時代には。自戒の念をこめて作った（朗人）」というのです。自戒の句が「沈黙は金、雄弁は銀」の諺をベースにしている点、芭蕉の「もの言へば唇寒し秋の風」が「無道人之短、無説己之長（『文選』）」に因つたのに共通しています。句としての完成度・是非ではなく、その人の生き方を垣間見るような気がします。



季語 金木犀（秋）
場所 中区東伊場
縣居神社
建立 平成 11 年

有馬 朗人（1930 - ）大阪の生まれ。旧制浜松一中に在籍、途中転校。物理学者。もと東京大学総長。平成2年『天為』を創刊・主宰。

朗人
あきと

513

月影や四門四宗もたぎひとつ

つきかげ しもんししゅう

芭蕉が善光寺で詠んだ句です。江戸時代、法林寺に善光寺如来を祀る堂があり、善光寺に参詣したと同じ御利益があると信じられていました。「善光寺にお参りすると、金山清らかな月光に包まれて、四門四宗に分かれているこの寺も、今は渾然一体の崇高な領域になっているよ」というのです。江戸期に地元の蕉門俳人が建立。空襲で破壊されましたが、再建されました。



季語 月影（秋）
場所 中区成子町
法林寺
建立 昭和 57 年

松尾 芭蕉（1644 - 1694）伊賀上野の生まれ。本名・宗房。別号・桃青。蕉風俳諧を確立。俳聖と尊称される。東海道を往来したが、浜松市、湖西市で詠んだ句はない。

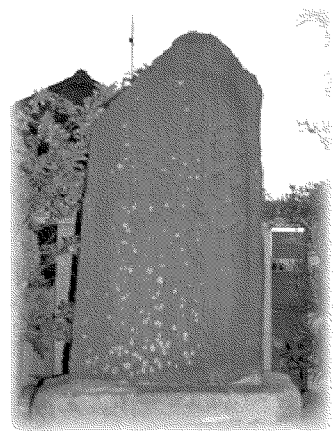
ばせを

544

つき かぜ なつ なみ うみ うみ
月や風や夏しら波の海と湖

じつこ
十湖

鳥居を通過し突き当りに建つ2基の右側です。今切口を境にした遠州灘と浜名湖を、水平の広がりに加え、立体的にもとらえた吟です。十湖の還暦の寿碑です。左側は十湖もその除幕式に遅れて出席し、記念写真中央に収まった大正14年建立の子規の碑です。俳壇の主流が日本派に移行しつつあるなかで、依然として旧派の勢力は無視できなかった時代の逸話の一つです。



季語 夏 (夏)
場所 西区舞阪町舞阪
弁天神社
建立 明治41年

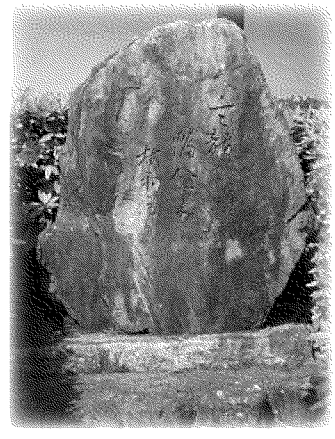
松島 十湖 (1849 - 1926) 遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧と報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。

571

てんりゅう はばはちちょう つゆにご
天龍の幅八丁の梅雨濁り

としお
年尾

天龍川は日本を代表する大河です。でも普段は水量が少なく、白い河原ばかりが目立ちます。他から来た人は、拍子抜けがするのですが、梅雨の季節、一旦雨が降ると様相は一変し、およそ幅1kmの濁流が逆巻く。暴れ天龍の圧倒的な存在感を現わします。普伝院の廿五世・淳応師がホトトギスの同人であった縁で、虚子の長男で主宰者の高浜年尾の碑が建立されました。



季語 梅雨 (夏)
場所 東区安新町
普伝院
建立 昭和52年

高浜 年尾 (1900 - 1979) 東京の生まれ。高浜虚子の長男。昭和26年『ホトトギス』を継承・主宰。星野立子は実妹。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

572

天龍のへりに椅子おく夕涼み

風生

「天龍川の縁に椅子を置いて、心地よい川風に吹かれながら夕涼みをすることだ」というのです。「天龍のへり」とは、疎開中に訪れた妻の親戚・二俣町鹿島の杉浦宅と伝えられています。碑の建立された鳥羽山公園から見下ろす大天龍を素直にそれと鑑賞するほうがスケールが大きく、悠久の自然とそこに溶け込む脱俗の人といった、一幅の絵を見る思いがします。



季語 夕涼み (夏)
場所 天竜区二俣町二俣鳥羽山公園
建立 昭和 48 年

富安 風生 (1885 - 1979) 愛知県の生まれ。本名・謙次。通信省に奉職。『若葉』を主宰。妻は天竜区阿多古の人。姉は北区三ヶ日町に嫁ぐ。

580

訪人もひとふしあれや竹の春

七十二峰庵十湖居士

句意は「せつかくやって来たのだから、せめて一句なりとも詠んでみなさいよ。季節もちょうど秋なのだから」と歓迎しているのです。一節(＝一句)と竹の取り合わせが、この句の面白いところです。当時の撫松庵は、俳人や画家など食客が大勢出入りし、サロン化していました。「竹の春」は、竹は秋に盛んに成長するので秋の季語です。



季語 竹の春 (秋)
場所 東区豊西町十湖百句塚
建立 明治 39 年

松島 十湖 (1849 - 1926) 遠江を代表する旧派の宗匠。夷白、嵐牛、春湖に師事。俳諧と報徳の融合を図り、教訓的性格の句を特色とする。百人一句塚の主宰者。門人と句碑は全国に分布。

あ行

か行

さ行

た行

な行

は行

ま行

や行

ら行

わ行

583

時なれや春に先立つ梅の花

藤廼家春鳳



季語 梅の花 (春)
場所 東区笠井新田町
高井邸
建立 昭和2年

「温かい光満ち溢れた春になった。いち早く梅の花が咲いたことだよ」というのです。高井邸の庭には、その日中央の頌徳碑、左右に十湖と春鳳、3基が除幕されました。報徳と俳諧に生きた故人の姿がしのべれます。春鳳は十湖の俳弟子第1号。嗣子・春雄、孫・三菁と3代にわたって十湖門の重鎮で好文居を継承しました。3代の共同碑が平成20年に完成しました。

高井 春鳳 (1847 - 1925) 東区笠井新田町の人。本名・善蔵。別号・藤廼家、好文居。十湖の門人第一号と伝えられる。嗣子・春雄、孫・三菁と三代にわたる十湖門の重鎮。

589

年歴ぬる花に花咲く法の庭

東峨



季語 花 (春)
場所 湖西市新居町中之郷
清源院
建立 昭和55年

満開の桜を前に、「年ごとに見事に盛んになつてゆくこの花のように、我が家と菩提寺のますますの繁栄を願うことだ」というのです。清源院は五味家の菩提寺です。五味家は、関所の管理が幕府から吉田藩に移った元禄15(1703)年に、与力(下級武士)から初代番頭(責任者)となり、以後代々世襲で番頭をつとめた名家で、明治2年の関所廃止まで7代を数えました。

五味 東峨 (1715 - 1802) 湖西市新居町の人。本名・六郎左衛門高しげ。別号・華喬。新居関所の番頭(世襲)。

590

とそ
屠蘇くむや
おい
老も九十の舞扇
まいおうぎ

れんだい
蓮台

幕末・明治・大正・昭和と活躍した女流俳人。卒寿そつじゆを迎えてなお元気な新春の様子みねじよが浮かんできます。まだ峰女みねじよを名乗っていたころ、大隅家「すみや」の番頭・富田大作に俳諧の手ほどきをしました。後に十湖門の高弟となり、白童子しごうを嗣号しごうした秀甫です。この碑は秀甫が報恩ほうおんの意を込めて建立したものです。天竜高校の裏山にひっそりと建っています。



季語 屠蘇（新年）
場所 天竜区二俣町二俣
浅間神社
建立 昭和 15 年

大隅 蓮台（1842 - 1931）天竜区二俣の人。本名・峰。別号・峰女、烏帽子園。松島十湖門。

593

じせい
辞世
とて
逆もゆくころせはしや雪の山
ゆき やま

ばいほうこうかんあんしゅ
梅芳江寒庵主

この碑は、文化10（1813）年に没した竹茂なる人物の墓です。台座に施主・弟子として30人、世話人として3人の名が読み取れます。六角柱の墓の正面には「竹茂の墓」と辞世の句が、残る五面に三河俳人を含めた11人の句が刻されています。

当時この地に「宇志連うしれん（仮称）」なる俳諧結社があり、三河俳壇の影響下にあつたことなどが知られ、文化史的にも貴重な資料となっています。



季語 雪の山（冬）
場所 北区三ヶ日町宇志
共同墓地
建立 文化10（1813）年

片山 竹茂（不詳 - 1813）名は伝平正房。号は梅芳江寒庵。北区三ヶ日町の宇志八幡宮の宮司。三ヶ日「宇志連（仮称）」の主宰者。